英国中等教育向け日本語リソース
『力―CHIKARA―』を使った日本語教師研修会の実践

来嶋洋美・宇田川洋子・ミドルトン晶子・村田春文

〔キーワード〕英国、教師研修、中等教育、日本語教育、『力―CHIKARA―』リソース

〔要旨〕

JFロンドン事務所では、2005年度から英国中等教育向け日本語リソース『力―CHIKARA―』開発プロジェクトに取り組んできた。プロジェクトは、関係者が共有できる日本語教育リソースを開発すること、開発後にはそれを使った研修会を実施して日本語教師の資質向上とネットワークを拡げ深めることを目指した。この報告では『力―CHIKARA―』を使った５つの日本語教師研修会について、具体的な内容と方法、参加者の反応等を述べる。５つの研修には、『力―CHIKARA―』リソースを素材として利用した日本語教授法と教材作成の研修、『力―CHIKARA―』以外のJF開発教材もいっしょに利用した研修、ノンネイティブ教師の日本語ブラッシュアップを目指した研修が含まれる。参加者からは研修内容が良かったこと、新しい教育情報を得られたこと、そしてほかの日本語教師と交流できたことに対する肯定的な評価を得ており、今後もこのような研修会を企画したいと思っている。

１．はじめに

国際交流基金ロンドン事務所の日本語教育部門である「ロンドン日本語センター」[1]（以下、JFLLC：The Japan Foundation London Language Centre）では、英国の日本語学習者約15,000人のうち8,500人を占める中等教育のニーズに応えるべく日本語教育支援事業を行っている[2]。その一環として、2005年度から2007年度にかけて中等教育向け日本語リソース『力―CHIKARA―』開発プロジェクトに取り組み、教材や教師用参考資料など多くの成果を提供できるようにした。その経緯は来嶋・村田（2008）で報告したが、『力―CHIKARA―』開発の背景には、英国中等教育で目標となっているGCSE（General Certificate of Secondary Education）の日本語コースのための全国共通教科書がないためにカリキュラムや授業の典型がつかみにくく、支援事業を企画する上での障害になっているということがあった。そこで、英国の関係者が共有できるリソースを開発し、開発後にはそれを使った研修会を実施して日本語教師の資質向上と同時にネットワークを拡げ深めていくということがプロジェクト全体の最終目標であった。

現在、『力―CHIKARA―』はJFLLCウェブサイトからの無料配信のほか、CD-ROMの無料

配布、ハードコピー（教材を印刷したもの）の実費頒布など様々な方策を用いて、英国全国の日本語教育関係者に行き渡るようにしている。実際に使用するかどうかは現場の先生方の判断によるが、少なくとも、『力―CHIKARA―』が英国の日本語教育関係者なら誰でも入手できる／入手しているリソースと言うことはできる。従って、前述の目標を達成すべく、公開後はJFLLCが英国の状況に合わせた独自の教育方法を提案するために、『力―CHIKARA―』を使った様々な研修会を企画、実施している。本論ではその研修会の実践を報告したいと思う。

2．『力―CHIKARA―』リソースと教師支援

2.1 『力―CHIKARA―』について

前述のように英国では、中等教育の最終学年で受験するGCSEでよい成績をとることが日本語学習の目標となっている。しかし、参考になる資料はGCSE試験シラバスしかないため、各校の先生方が経験の有無に関係なく自力でカリキュラムをつくり、教材を準備している。『力―CHIKARA―』はこのような先生方を支援するために開発された日本語教育リソースで、教材を含む以下４種類のリソースで構成されている。

① GCSE参考資料：GCSE文型リストJFLLC版、GCSE語彙リストJFLLC版

文型リストはGCSE日本語試験シラバスの文法項目を文型に読み換え、日本語能力試験などを参考にして難度をつけたものである。語彙リストはあいうえお順リスト、品詞別リスト、トピック別概念で語彙を分類したリストがある。

② 『力―CHIKARA―』シラバス：「わたし」「学校」「町」「日本」の４つのトピック

GCSE試験シラバスで示されているトピックに合うように、上の４つのトピックを設定した。「わたし」「学校」「町」は各トピックをさらに20のサブトピックにわけて、モデルテキスト、学習目標、文型、語彙等の情報を記載。これらはトピック別であると同時に、文型を難度に配慮して配列した点に特徴がある。「日本」は読解活動を中心に進める授業のために作ったシラバスで、日本の生活と文化に関する７つのサブトピックについて、文型、キーワード、日本文化事情のポイント、発展課題の教師用情報、本文の写真と参考資料の出典等が参照できる。

③ 『力―CHIKARA―』教材：「わたし」「学校」「町」合計33サブトピック分

各サブトピックは、モデルテキスト、練習１（文型練習）、練習１用ICT（コンピュータ使用教材）、練習２（コミュニケーション練習）、練習２用ICT（コンピュータ使用教材）、音声、の６種類の教材で構成されている。これらは「導入→基本練習（形の練習→形と意味の練習）→応用練習」という初級授業の流れに沿ったものである（国際交流基金2007）。

④ 『読む力―CHIKARA for READING―』教材：「日本」７サブトピック分

この教材は2008年３月に公開したもので、日本の生活と文化をテーマにした読解テキスト、理解問題、文型練習、漢字と語彙の練習問題、発展活動のための教師用情報、音声等からなっ

ている。テキストはGCSEがカバーする文型（日本語能力試験３級以下）で書かれた簡単なレベルのものである。

2.2 『力―CHIKARA―』リソースがなし得る教師支援

2.2.1 授業で使用する「モノ」の提供

『力―CHIKARA―』リソースでどのような教師支援ができるのか、まず、モノという視点から考えてみる。『力―CHIKARA―』は300以上にもなる教材をすべて無料でだれでもダウンロードすることができる。日本語の先生方が、多忙でJFLLC図書館へ行く時間がなくても、あるいはロンドンから離れた地域に在住していても、インターネット接続されたコンピュータがあれば入手可能なモノがここにはある。日本語ネイティブではない先生にとっては、自作教材のように日本語の間違いを心配するようなことなく使えるし、日本人が録音したモデルテキストの音声を聞かせることもできる。さらに練習２（コミュニケーション練習）は活動の指示が英語なので、日本語で書かれた活動集を読むときのような億劫さは軽減できるはずである。また、英国においてはICTの教育利用が推進されているが、『力―CHIKARA―』のICT教材は学習者の理解に応じて個別学習にも使えるほか、教室での一斉指導にも利用できる。教材を自分の授業に合わせて手直ししたい先生方は、『力―CHIKARA―』CD-ROM版に入っている編集可能な電子ファイルを使えばよい。

このように、シラバスを教材化したことは実際に教室で使うモノを提供するという支援を実現している。英国中等教育の多くの先生方は、以前からGCSE日本語を教えるための教材の不足を嘆いてきたが、おそらくこのような先生方にとって『力―CHIKARA―』の最も現実的で大きな貢献は教材の提供ではないかと思われる。

2.2.2 参考情報の提供

実際に教室で使うモノ以外に、日本語を教えるために必要な様々な情報の提供も、『力―CHIKARA―』による支援である。そのような情報には、第１に、カリキュラムデザインのための参考情報がある。各校の先生方がカリキュラムを作成する際よく参考にされているのは、豪州のトピックシラバスによる教科書であるが、GCSE日本語を土台にして作成した『力―CHIKARA―』シラバスは、トピックをカバーすると同時に文型学習の積み上げや、会話テキスト中心から読解テキスト中心というコース全体の学習の流れが考慮されているという点で、英国の先生方にとって有用な情報が多いと思われる。

第２に、授業計画のための参考情報として、１つのサブトピックの教材６種を全部使用する場合に、導入、基本練習、応用練習という流れに沿った授業が実施できるように説明されている。もちろん『力―CHIKARA―』だけでは足りない活動もあると思うが、経験の浅い教師であっても基本的な授業設計の枠組みの中でどのような手順で授業をすればいいか、目安になる

はずである。

第３には、教材作成のための素材及び参考情報の提供が挙げられる。シラバスに記載しているモデルテキスト等の項目はそのまま教材作成の素材として使える。すでに教材化したものを見ながら、同じように作ってみることもできるし、日本語ネイティブではない教師も、教材作成の技術があれば、日本語の間違いを心配しないで取り組める。また、『力―CHIKARA―』シラバスには、同一文型を使った異なるトピックがあるので、文型の復習や応用力をつけるための教材や活動が必要な場合にも参照できよう。

2.2.3　教師研修の素材としての機能

2.2.1と2.2.2では、授業で使うモノと様々な情報の提供という点から、『力―CHIKARA―』にできることを述べた。これらはすべてインターネットによって入手可能であり、利用する先生方自身の方法で自由に使われていくものであるが、開発の根拠となる考え方と開発者（JFLLC）が意図した使い方についてよく知れば、より効果的な日本語指導につなげていくことができる。そのためにJFLLCのアドバイザーと参加者、そして参加者同士が実際に互いの顔を見ながら進めていける研修会は有効な手段と言えよう。

研修会には教師の指導力や日本語教育の専門知識の増強といった資質向上に貢献すると同時に、教師間のネットワークを強化するという目的がある。ここで『力―CHIKARA―』のモノと情報を素材として利用することによって、その普及促進活動だけでなく、JFLLCの独自性を持たせた研修会を積極的に展開していくことが可能になる。

3．日本語教師研修会

本章では、2007年10月から2008年７月にかけてJFLLCで実施した５つの研修会について報告する。はじめの３つは「日本語教師のための『力―CHIKARA―』研修会」としてシリーズで実施したもの、１つはCPD（Continuing Professional Development）と呼ばれる現職者研修として新規に企画したもの、そして最後にノンネイティブ教師を対象に毎年実施しているリフレッシャーコースをとりあげる。いずれの研修会も参加費は無料であるが、施設の制約上定員20名とし、参加希望者には事前に申し込みをしてもらった。また、研修に参加した先生方全員に「研修参加証明書」を発行した。研修会のテーマや方法はいろいろあるが、いずれも研修で扱う素材として『力―CHIKARA―』リソースを使用している。

3.1　日本語教師のための『力―CHIKARA―』研修会

『力―CHIKARA―』は2007年６月に制作発表とリソース紹介を目的とした研修会を行っている。その後、同年10月、12月、2008年２月にシリーズで日本語指導法と教材作成の面からテーマを設定した研修会を行った。ここではこの10月以降の３回の研修会を取り上げる。

『力―CHIKARA―』研修会の対象は、中等教育でGCSE日本語を教えている日本語教員と『力―CHIKARA―』に関心のある方である。後者には、中等教育以外の機関で教えている日本語教員、日本語教師養成講座等で勉強中の方、ボランティアで日本語を教える機会のある方などが含まれる。非母語話者のために、研修会での講師の使用言語は「簡単な日本語」としている。

3.1.1 『力―CHIKARA―』研修会(1)

テーマ：授業の流れと『力―CHIKARA―』を使った効果的な授業計画 （Teaching Japanese with CHIKARA: Designing an Effective Lesson）

実施日：2007年10月30日

参加者：22名（うち、日本語ネイティブ19名　ノンネイティブ３名）

目　的：① 授業の流れについて理解する

② 授業の流れに沿って、『力―CHIKARA―』をどう利用するか考える

③ 参加者同士が、日ごろの教育実践について情報交換をする

内　容：

前半（80分） レクチャー	・初級授業の流れ（導入→形の基本練習→形と意味の基本練習→応用練習）の考え方の紹介。 ・授業の流れの各段階について、『力―CHIKARA―』リソースによる例を示しながらその目的にあった方法を説明。
後半（60分） ワークショップ	・『力―CHIKARA―』の教材を使って、授業の流れを考えながら教案を書いてみる。３～４人でグループ作業。 ・作業終了後、全体発表。

配布物：・『初級を教える』（国際交流基金2007）をもとに作成したレジュメ

・『力―CHIKARA―』やその他市販の日本語教科書を抜粋した資料

・ワークショップでの教案作成用の『力―CHIKARA―』の教材と、教案例

10月に行ったこの研修会は、『力―CHIKARA―』の提供するモノ（教材）の使い方についてわかりやすく説明する機会を持つために企画した。具体的には、初級の日本語授業を効果的に設計するためにはどうすればいいか、その中で『力―CHIKARA―』リソースをどう取り入れるかということを内容にした。ここでは、初級日本語授業の流れを枠組みにして、各段階の目的と教室活動例を示しながらレクチャーを進め、後半はグループで実際に教案を考えてみることにした。

教授背景や教授経験の違いに関わらず、参加者全員が何かを得られる内容にしたいと思い、まだ授業設計の考え方に慣れていない方のために理論面は基本をわかりやすく、また、もうわかっている方も教室活動の新鮮なアイディアを得ることができるように、活動例をできるだけたくさん取り入れることにした。

実際にはレクチャーでかなり時間がかかり、グループ作業の時間が短くなってしまった。教

案を書くには、もう少し時間的余裕が必要と感じた。ただ、教室活動の例をかなり示したので、参加者からは、具体的で仕事に大いに役立つ、実践的でわかりやすい、という評価を多く得た。

3.1.2 『力―CHIKARA―』研修会(2)

テーマ：日本語の教材をつくる　その１『力―CHIKARA―』の再利用／編集（Making Japanese Teaching Resources Part 1: Reusing / Editing CHIKARA Resources）

実施日：2007年12月３日

参加者：15名（うち、日本語ネイティブ12名　ノンネイティブ３名）

目　的：①　各自のニーズに合わせて教材を再利用／編集する方法を学ぶ

②　リソースの再利用／編集のアイディアを参加者同士で交換する

内　容：

前半（60分） レクチャー	・『力―CHIKARA―』の簡単な紹介。 ・教材の編集、加工について、なぜ必要か、どう編集するか、『力―CHIKARA―』教材を加工した実例を見ながら説明。
後半（予定60分） ワークショップ	・『力―CHIKARA―』の教材（モデルテキスト、文型練習、コミュニケーション練習）のテキストやイラストなどを編集して、目的の違う教材に作り変える。スキル（読解、会話）の教材と言語知識（語彙、文型）の教材の両方を作ってみること。２～３人のグループ作業。 ・作業終了後、全体発表。

配布物：・教材再利用／編集の方法について示したレジュメ

・『力―CHIKARA―』のいろいろな編集例を集めた資料

12月の『力―CHIKARA―』研修会は『力―CHIKARA―』の提供するモノ（教材）を先生方が自分の授業に引きつけて使えるようになることを目指して、教材を教室活動の目的に合わせて編集する方法をテーマにした。教材の加工は、現場の教師が日常的に行っていることであり、より多くの教師にとって実践的な内容にできるのではないかと思われた。

まず、自分の授業で必要な教材にするために、既存の教材（ここでは『力―CHIKARA―』）のどの部分をどんなふうに変えることができるか整理した表で全体的な枠組みを示し、それから、４技能を教える教材に変えた例、言語知識を教える教材に変えた例、オリジナル教材の難易度や練習量を変えた例などを見ていった。最後にこれらの例にならって、『力―CHIKARA―』を実際に加工し、別の教材にするという作業を行った。

この研修会では特にワークショップが盛況だった。それは、時間を十分にとったことだけではなく、参加者にとって教材に手を加えるという作業に馴染みがあり、活動に各自自信をもって積極的に取り組めたからではないかと思う。発表では作った教材を壁に貼って、その前で説明をした。参加者は、ほかのグループが作ったものも熱心に見てまわり、意見交換も活発に行われた。さらに、ふだん１人で作業しているのでグループ作業はとても楽しかった、ほかの人

のアイディアを聞くことができてよかった、実際に作業をして前半学んだことの理解度が増してよかった、というワークショップへの肯定的な評価を得た。

3.1.3 『力―CHIKARA―』研修会(3)

テーマ：日本語の教材を作る　その2『力―CHIKARA―』シラバスから文型練習用教材を作る（Making Japanese Teaching Resources Part 2: Using the CHIKARA Syllabus to Make Resources for Practicing Japanese Structures）

実施日：2008年2月6日

参加者：17名（うち、日本語ネイティブ16名　ノンネイティブ1名）

目　的：①『力―CHIKARA―』シラバスをもとにして、文型練習用教材を作る

②　教材作成のアイディアをほかの人と交換する

内　容：

前半（60分） レクチャー	・『力―CHIKARA―』の簡単な紹介。 ・シラバス一般、及び『力―CHIKARA―』シラバスの説明。 ・シラバスと教材作成、日本語指導と教材、文型練習用のワークシートのいろいろな形式、『力―CHIKARA―』の文型練習について説明。
後半（75分） ワークショップ	・『力―CHIKARA―』シラバスを使って、文型練習用の教材を作る。2～3人のグループ作業。 ・留意点：シラバスにあるモデルテキストを活用すること、モデルテキストの内容を活かして文型練習の例文や語彙を考えること、GCSE日本語JFLLC版トピック別語彙リストを活用すること、練習の目的と形式をよく考えること、表やイラストなど使ってもよいこと、など。 ・作業終了後、全体発表。

配布物：・シラバスと文型練習用教材について説明したレジュメ

・レジュメの補足資料（『力―CHIKARA―』文型練習の形式を整理した資料など）

12月のテーマ「教材を編集する」に続けて、2月はいよいよ『力―CHIKARA―』シラバスを教材化することに挑戦した。これは『力―CHIKARA―』の提供する参考情報の利用を体験することを意図したものである。具体的には『力―CHIKARA―』シラバスの3トピック（「わたし」「学校」「町」）59サブトピックのうち、まだ教材化していないサブトピックを選んで、文型練習用教材にするというタスクにグループで取り組むことにした。

この研修会の難所は、一般的な文型練習の目的と形式だけでなく、『力―CHIKARA―』シラバスの特徴も理解して作業を進めなければならない点にあったように思う。それは、ワークショップの留意点である「モデルテキストの内容を活かして文型練習の例文や語彙を考えること」に表れている。一般に初級日本語教科書は文型シラバスのものが多いが、このタイプの教科書の文型練習に使われる文は、内容的にトピックとの関連性が特に考慮されているわけではない。このような文型シラバスの教科書に慣れている先生方にとって、トピックや内容をベー

スにした文型練習を作るために頭を切り替えることは、少したいへんであると同時に新鮮でもあったようだ。だからこそよく考え、話し合い、アイディアを出し合うことができたのではないかと思う。実際の教材作りは難しかったが勉強になった、教材作りの楽しさと難しさを体験した、という意見が多く寄せられたことは、このことを反映しているように思われる。また、前回同様、この研修会もグループ作業による意見交換やアイディアの共有ができたことが評価されていた。

3.2　日本語教員のためのCPD

3.1で取り上げた３つの研修会は、特に『力―CHIKARA―』リソースを素材にして教授法と教材作成を学ぶ半日のものであったが、2008年５月は「日本語教員のためのCPD」という現職教員の資質向上を目的とする研修を新たに企画した。今回は、日本語ネイティブか日本語能力試験３級以上の日本語力を有する英国の初等／中等教育の日本語教員を対象にした。モノ（教材）の紹介や体験授業の素材として『力―CHIKARA―』だけでなく、シドニーや日本の国際交流基金が開発した教材も利用して、３日間にわたる研修会を実施した。

実施日：2008年５月28日、29日、30日

参加者：19名（うち、日本語ネイティブ14名　ノンネイティブ５名）

目　的：①　日本語教授法に関する知識と技術の向上を目指す。

②　日本文化の理解と、教授法に関する知識及び技術の向上を目指す。

③　日本語ネイティブではない教員は、日本語力向上を目指す。

④　国際交流基金、同ロンドン事務所、同シドニー日本文化センターで開発した日本語教育用教材に関する知識を得た上で、その使い方を考える。

コース全体の構成と主な内容：

１日目 「教材」	・『力―CHIKARA―』リソース完成版の紹介 ・『エリンが挑戦！にほんごできます。』紹介 ・ワークショップとシェアリング：初等／中等教育向け日本語教科書と教材
２日目 「博物館に行こう」	・『力―CHIKARA―』の教材（博物館見学関連のもの）、JFシドニーが開発に関わった教材『Art Speaks Japanese』、大英博物館資料、の紹介 ・大英博物館訪問 ・ワークショップとシェアリング：博物館教材のワークシート、アクティビティー
３日目 「Activities & Strategies」	・『読む力』の教材（「季節と俳句」）を使った授業例 ・俳句をつくる　・俳句ポスターをつくる ・ディスカッション「課題と取り組み」

１日目は「教材」をテーマに、様々な教材を内容や構成がよくわかるようグループ作業を取り入れながら見ていった。読解テキストを中心にした教材『読む力―CHIKARA for READING―』からはサブトピック「日本人のお祝い」を特に取り上げ、構成、使い方、アクティビティーのアイディアを話し合った。また、国際交流基金制作教材『エリンが挑戦！にほんごできます。』は第12課「友だちと話す―部活―」をチャプター毎に視聴しながら教室での利用方法などを意見交換した。最後に、JFLLC図書館蔵書の中から、英語圏の初等／中等教育向けの日本語教科書として比較的人気のあるものを紹介し、英国でも使えるかどうかグループでチェックリストの項目にそって検討し、その後意見交換をした。

参加者からは、いろいろな教材を丁寧に見ることができて良かった、『力―CHIKARA―』や『エリン』など紹介された教材を使ってみたいという声が多く寄せられた。

２日目のテーマは「博物館に行こう」である。大英博物館はJFLLCから徒歩５分の至近距離にある。英国の学校は博物館や美術館に生徒を連れて見学に出かけることがよくあるので、『力―CHIKARA―』にもこのことをサブトピックにした教材がある。また、国際交流基金シドニー日本文化センターがニューサウスウェールズ州立美術館に協力して開発した『Art Speaks Japanese』は日本語と日本美術の学習を統合させた斬新な教材である。２日目はこれらの教材と大英博物館の資料をまず紹介し、大英博物館に実際に見学に行き、最終的にはそこで得た情報を利用して『Art Speaks Japanese』のような教材（美術をテーマに日本語を使うワークシート）を作成するワークショップを計画した。ワークシートは生徒の年齢で分かれた４つのグループで作業をした。

参加者からの反応としては、教材のいろいろなアイディアが得られてよかった、実際に近々大英博物館へ生徒を連れて見学に行くので予行演習になってよかった、博物館で日本について学べたし、それをどのように日本語指導に使うかを考えるのにとてもよかった、教室を出ての語学学習の機会としてとても良いと思った、など全体的にたいへん高い評価を得た。

３日目は「Activities & Strategies」をテーマに進めた。『読む力』の中からサブトピック「季節と俳句」の教材を使って、内容、構成、使い方を確認しながらアクティビティーを紹介、実施した。さらに、俳句を作って発表する授業のデモンストレーションも行った。そこでは、学習者を俳句づくりに導く方法を紹介し、作品を各自がポスターに書き、イラスト、デザインを描き、リハーサルの後、クラスでの発表を行った。実際に俳句を作り、ポスターを描いて発表するのは、日本人の先生方には退屈なのではないかと少々心配していたが、予想外に良い反応だった。学習者向けのアクティビティーを受身的に聞くだけでなく、先生方自身も体験することで、自己表現と参加者同士の相互交換を通したさらに深い学びができるのかもしれない。

最後のディスカッション「課題と取り組み」では、参加者１人１人が「今困っていること、知りたいこと」などを出し合い、それをグループで整理して、項目別に大きい紙に貼り、さら

に見出しを入れて、ポスターを作ってもらい、それをみんなにレポートするというものである。ふだんは自分の勤務校の仕事で手一杯なため孤立しがちな日本語教師が、課題を仲間と共有するという大切な第１歩になったと思う。

参加者からは、俳句を使ったセッションについては、俳句は作るだけでなく読解などでも活動ができるとわかって参考になった、俳句を作るアクティビティーが楽しくクラスでもやってみたい、という意見が多く、たいへん楽しんでもらえたようである。またディスカッションについては、もっとディスカッションしたかった、このような機会がもっとあればいいと思う、同じような悩みをいろいろシェアできてよかった、という反応であった。お互いに課題と取り組みを話し合う時間が貴重であり、もっとこのような機会をもちたいという要望が多く寄せられた。

3.3　リフレッシャーコース

初等／中等教育機関で日本語を教えているか、または教えたいと思っているノンネイティブの学校教員を対象に、毎年学校の夏季休暇中に行っている研修会で、参加者の日本語力は日本語能力試験３級程度以下が応募条件になっている。ノンネイティブ教師の日本語力のブラッシュアップが研修の主目的で、自らの日本語に磨きをかけて、日本語指導にも自信が持てるようになってもらうことを期待している。また、他の研修と同様、学期中はなかなか集うことのできない教師たちが、研修をきっかけに相互交流の場を持つことも大切な目的である。

このリフレッシャーコースは、JFLLCとしては『力―CHIKARA―』を日本語授業で自ら使用する貴重な機会である。2006年に『力―CHIKARA―』を初めて教材として試用、2008年は主教材として使用することにした[(3)]。

実施日：2008年７月21日～25日（５日間）

参加者：14名

クラス：応募時の日本語力自己申告をもとに次の２つのレベルを設定。Ａクラス（日本語能力試験４級まで）４名、Ｂクラス（日本語能力試験３級程度）10名

目　的：ノンネイティブ日本語教師の日本語力の向上

コース全体の構成と主な内容：

	全体的な流れ	Aクラスのサブトピック	Bクラスのサブトピック
1日目	インプット中心 （聞く、読む）	「わたし」（M 1） 「しゅみ」（M 6）	「学校の中」（S 11） 「いろいろな教室」（S 12）
2日目		「しゅみ」（M 6） 「生活 1 」（M 8） 「生活 2 」（M 9）	「教室で」（S 14） 「学校の規則」（S 17） 「博物館見学」（S 18）
3日目	大英博物館見学と 資料集め	見学準備 「季節と俳句」（J 4）	「博物館見学のレポート」（S 19）
4日目	アウトプット中心 （書く、話す）	俳句ポスター作り 「誕生日」（M10）	「季節と俳句」（J 4）
5日目		発表会　・劇「にんじゃ」　・自作俳句と川柳の発表 ・博物館紹介ポスターの発表	

主教材は『力―CHIKARA―』［トピック　M：Myself（わたし）／S：School（学校）／J：Life & Culture in Japan（日本）］、（　）内はサブトピックの番号

コースの内容は5日間という短期集中型の研修の中で、参加者が成果を感じられるようなものを目指した。また授業で取り上げた語彙や文型は、GCSE試験やGCE試験（General Certificate of Education）[4]を考慮に入れ、言語活動も初等／中等教育レベルに簡単に応用できるようなものにした。特に、午前中の授業では『力―CHIKARA―』を使って授業を行い、そのモデル授業としての機能を持たせた。5日間の全体的な流れとしては、最初の2日間を聞く、読むなどの活動からなるインプット型の内容とし、中日に大英博物館見学と資料収集、残りの2日間を主に話す、書く活動を中心としたアウトプット型の内容とした。特に最終日は発表の日として、日本人の日本語ボランティア教師を招待し、劇、俳句と川柳の披露、大英博物館の展示物を紹介するために作製したポスターを見せながら話すといった発表活動を行った。

リフレッシャーコースの難しさは、日本語能力試験3級以下という条件をつけていても、参加者の日本語レベルが2つのクラスには収まりきれないほど多様であることである。一方で、様々なレベルに対応するべくクラスを増やすことは、施設や予算面での条件から考えてひじょうに難しい。イギリスの学校現場ではクラス内の実力差がある生徒たちにどう対応するかということが常に学校と教員に問われるので、教員自身が研修会等で学習者の立場に立ったときにも、同様のことを求めてくる傾向がある。それになんとか応えなければならないのであるが、今回の場合、特にAクラスでは参加者の日本語力に合わせて『力―CHIKARA―』に手を加えた教材を作って対応することができた。例えば、文字の定着が不十分な参加者のために、ローマ字併記、語や文の英語の意味を記載したり、俳句をテーマとした読解用テキストをより簡単に書き直して使用するなどして、最終日の発表にまでつなげていった。『力―CHIKARA―』CD-ROM版には、編集可能なファイル形式を準備しているので、これを利用することで講師

の負担をひじょうに軽減することができた。

Ｂクラスは『力―CHIKARA―』がGCSE向き日本語リソースである点に注意が向き、特に中等教育の現場で教えている参加者の質問や発言がGCSE試験絡みになりがちであった。研修の主目的は自身の日本語力向上であるが、どうしても学校での日本語指導のほうに関心が行ってしまったようである。

参加者からは、クラス内のレベル差と授業内容が自分にあっているかどうかという点での言及はあるものの、コース全体としては高い評価を得ている。５日間の大半を日本語で過ごすことは多くのノンネイティブ教師にとってこの機会をおいてほかにはないせいか、自身の日本語能力が期待していたよりも良くなったように感じているが、それにもまして研修前よりも日本語を教える自信がついたと感じている教師が多い。いろいろな教材や活動のアイディアを得ることができたこと、博物館見学や俳句を通して日本の文化について学べたこと、そしてお互いに知り合って情報交換できたことがとても良かったというコメントも得ている。

４．まとめ

以上、JFLLCが独自開発した日本語教育リソースを使った５つの研修会について報告したが、いくつかの課題もある。例えば、英国では休暇期間が学校によって微妙に異なるため、現職の先生方に参加してもらえる最適の日程を組むことがひじょうに難しい。また、授業を休む場合は代替教員が必要になるし、地方在住の先生方がロンドンに来るための交通費もかかる。このような費用を学校が負担できない場合も少なくない。今は、JFLLCの会場の都合もあって、受け入れ可能な参加者数は毎回20名程度までであるが、より多くの先生方に参加していただくためには今後も知恵を絞っていかねばならない。また、研修には教授経験や現在の教授環境、日本語教育の研修歴などが多様な参加者が集まるので、研修テーマについての理論的側面と実践的側面のバランスをよく考え、どの参加者も何か学ぶことができるような研修計画を立てる必要がある。日本語教授法の研修会の参加者に関しては、日本語ネイティブの先生の参加が多いことも特徴として挙げられる。英国の中等教育で教えている先生は40％が日本語ネイティブ、60％がノンネイティブと言われているが、教授法関係の研修会は、今回報告したリフレッシャーコース以外の４つの研修に限らずネイティブの先生が中心になることが多い。しかし、研修会がネットワーク形成の場として活性化するためには、ノンネイティブの先生方の参加が増えることが望まれる。

以上のような課題が残されているにも関わらず、研修会の実施によってJFLLCに足を運んでくださる先生が少しずつだが確実に増えている。そして、日本語を教えるための知識や技術を得るだけでなく、研修会の評価にも毎回あるように、なによりも先生同士が知り合い、お互いに情報交換や意見交換をし、そのことに対して先生方自身がとても満足しているということ

から、このような教師研修会を今後も実施していく意義は十分にあるように思う。

また、研修会における『力―CHIKARA―』リソースの利用方法も、教材としての紹介、体験授業、背景理論の学習、それを使ったワークショップ、リフレッシャーコースのような日本語授業の教材としての使用など様々であり、それぞれについて研修会の方法等を整理し、蓄積していくべきであろう。

最後に、国際交流基金ロンドン事務所のリソースのみならず、『エリンが挑戦！にほんごできます。』や『Art Speaks Japanese』など、国際交流基金が世界中で開発しているリソースに広く目を向けて研修会に組み込むことは、研修会の内容を国際交流基金らしく充実させる方策と言っても良いのではないだろうか。少なくとも英国の日本語教育関係者にとって、特に英語圏で開発されたリソースへの関心は高い。JFLLCとしては今後もさらに情報収集をし、支援事業のために大いに活用したいものだと思う。

〔注〕

(1)「ロンドン日本語センター」は外部向き呼称。

(2)日本語学習者数は国際交流基金（2008）による。

(3)2007年度は事務所内の理由により、やむを得ず中止した。

(4)GCE試験（General Certificate of Education）はGCSEの次の段階の試験で、大学入学選抜のために必要である。GCSE日本語のシラバスにある文型や文法は一部GCEと重なっている。

〔参考文献〕

来嶋洋美・村田春文（2008）「英国中等教育向け日本語リソース開発プロジェクト」『国際交流基金日本語教育紀要』第４号、103-114

来嶋洋美（2008）「試験シラバスから教材シラバスをつくる―GCSE日本語リソース『力―CHIKARA―』のシラバス開発」『ヨーロッパ日本語教育12』、189-195

国際交流基金（2007）『初級を教える』ひつじ書房

国際交流基金（2008）『海外の日本語教育の現状―日本語教育機関調査・2006年―』

国際交流基金ロンドン事務所日本語センター　『力―CHIKARA―』リソースのページ　〈http://www.jpf.org.uk/language/teaching_chikara.php〉

国際交流基金シドニー日本文化センター　日本語リソース『Art Speaks Japanese』のページ　〈http://www.jpf.org.au/03_language/artkit.html〉

ウェブサイトの参照日はすべて2008年９月30日